

東郷村報

第94号

昭和34年9月17日

発行所

宮崎県東臼杵郡

東郷村役場

日向市富高

安藤印刷所

電話 64番



牧水祭記念号

牧水祭を迎えて

牧水顕彰会長 黒木松美

日本文学アルバムに牧水先生について次のように記されています。

「若山牧水氏にあつては、寂寥を寂寥とする純一無垢な心が、また、それゆゑの飄逸なあそび心が、歌にも旅にも酒にも貫通して心を通じられる。今日では、この型の詩人は少ない。しかも、自分を確かめるための歌、旅、酒となつてゐるところに、現代人の屈折の多い心魂にふれるものがある。その四十四才の生涯に遺した六千八百九十六首の短歌には、まことに歌として朗誦すべき格調の高い絶唱が多い。およそ酒を愛するほどの人に愛唱されてゐる讃酒歌のいくつもある。更に短歌以外に

すぐれた紀行文があり、短歌に劣らないくらいに読者ももつてゐる。」

牧水先生

日本文学アルバムによる

幼年時代の牧水は、四季を通じて山や林に親しみ、水泳や釣りを好んで、やがて少しずつ文学を知るようになる。少年雑誌や姉たちの読み古したものをふり仮名を辿つて読んだ。十一才の時に初めて小説といふものを手にした。報知新聞に連載されていた村井弦斎作「朝日楼」で胸を躍らせて読み耽つたと「おもいで」の記に記してある。

明治二十九年三月、村の尋常小学校を首席で卒業すると、父母の膝下を離れて延岡町に出て、延岡高等学校に入學した。

延岡高等学校での担任教師日吉昇は、土地随一の文章家として知られた人で、牧水の才を愛し育成に力を尽した。明治三十二年三月に第三学年修業。この年の春、県立延岡中学校が開校され、牧水は百名中第四番の成績で入學し、二組中一方の副組長を命ぜられた。

二年の頃から文学書に親しむようになり、馬琴の八犬伝を求めて耽読したのもこの頃であった。当時生徒は小説類を読むことを厳禁されていたが、外出先から携えてきては、ひそかに耽読していた。また、刺戟の試合中に横面を打たれた鼓膜が破り、そのため晩年まで左の耳に多少の不自由を感じた。この頃、二年生の時であったらしい。

いたに刺されて同紙に投書したりした。坪谷 白雨楼 海に及びて帰る松原末遠も青葉若葉に白雨のふる天のしぎのぎのぎの青葉山青葉に白しすちの滝白鳩の鎮守の森に啼きたちて青葉幾重の明方の雨清水湧く山路なかばの松かげに荷馬車の旗のひるがへる見ゆ

全歌壇を風靡した。柴舟をはじめ全部の新派歌人が新社風特に晶子調の影響を受けた時代だけに、若い牧水もその影響を受けている。車前草社初期の牧水の歌は、実情感から遠くは遠く空想的な優婉華麗なものであつた。三十八年三月号の「新声」から二首をとれば、美しうさき歌よとははえまれば姉にそむけば春の雪ふる

この年の九月から英文科本科生となつた。翌年春あたりから同級生六名と共に「北斗会」を結んで小説研究をし、やがて回覧雑誌「北斗」を出しはじめた。その頃文壇に抬頭して来た自然主義文学の刺戟によるもので、牧水は固木田独歩の短編を書き、一時は小説家として立とうという野心をいだいてゐた。小説創作のための自然主義研究が作歌上にも影響している。机の上へ植木の鉢の黒つちに萌え出る芽あり秋の夜の灯よ

浪漫主義から自然主義への移行を示すものでこれは大きな進歩といつてよい。明治四十年(二十三才)に入つて牧水の歌はいちじらしい進展を示し、初期の歌風がほぼ確立した。小枝子と熱烈な恋愛に陥つたこの年であり恋愛もまた作歌の上にも大きな影響を及ぼした。かくて「新声」誌上における牧水の存在は、ようやく文壇に注目されて来た。

六月二十二日、東京を出発して帰省の途についた。土岐湖友、直井敬三と同行し歌壇見物をしてから、そこで奈良に向う土岐と別れ、神戸で直井と別れて一人で中国路に入つた。牧水にとっては初めての中国旅行であつたと共に、歌の上でも記念すべき旅行となつたのである。牧水の代表作「幾山河」の歌は実にこの旅行中の作であつた。

